

能《実盛》と老後の思い出

大阪大学准教授 中尾 薫

能《実盛》のモデル坂東武者の斉藤実盛が、その生まれ故郷にほど近い加賀国篠原で討ち死にしたのは、七十歳過ぐらいたったかと推測されている。白髪を黒く染め、赤地の錦の直垂を着け、若やいで討ち死にすることを生前から望んでいたという実盛は、この能の作者、世阿弥が伝書で説く、老人の物まねという、この道の奥義の手本のような存在かもしれない。「老木に花の咲かんが」とし「風姿花伝」物学条々とは、なかば謎かけのような説明だが、その背景には、「まづ仮令も、年寄りの心には、何事をも若くしたがるものなり」という、年寄りの若振る舞いへの願望の心と、しかし身体の衰えはそれについていけず、たとえば舞の拍子にも遅れる、といった微妙な心と体との齟齬にたいする老人の複雑な葛藤を理解することが求められている（『風姿花伝』別紙口伝）。実盛は、老武者ながら、まさに若やぎへの願望をもって戦に臨み、しかし最後は無念にも「軍には為疲れ」枯木の力も折れて、「手塚太郎光盛や郎党に組み伏せられ首を斬られてしまふのである。

実盛の幽霊が、死後二百年を経てさまよい出たのは、その首の鬢髪が洗われ、白髪と素性が露見した篠原の池のほとりである。そこで念仏勤行をする他阿上人の目にだけしか見えない不思議な老人は、今日も念仏の声に導かれて現れるが、「さなきだに立ち居苦しき老いの波の」撰取の光明曇らねども、老眼の通路なをもつてたどる」と、登場から老体の身の悲しさを強調する。他阿上人は素性を問われても、なかなか名乗ろうとせず、もとより余人には見えないのだが、人払いをしても良いとの上人の配慮に、ようやく

素性を明かすのである。とはいえ、すんなりとは明かさず、他人の話のように実盛の戦物語をはじめ、明かしたら明かしたとて、人に実盛の名を「洩らし給ふなよ」と、ことさらその名を秘すことを望んで失せてしまう。ここに、老骨となった実盛の見栄張りの性格を読みとることも、老いてなお武士らしく名譽や名を重んじる気骨をよみとることも可能であろう。しかし、実盛にとっては、この地の人には知られたくない、という思いがあったように思われる。

この地にたいする実盛のこだわりは、赤地の錦の直垂を来て戦に出たことからうかがえる。後場において、懺悔の物語を求められた実盛は、『平家物語』巻七にも語られ、おそらくは誰もが知る実盛の首洗いの場面を、他人の話のように語る（語り）。それから、おもむろに、錦の直垂の意味を告白するのである（クセ）。それは、実盛の生まれ故郷が北国の越前で、このたび北国に下れば討ち死にするだろうから、故郷に錦を着て帰るといふ言葉の通り、錦の直垂を着て出陣することを許してくれるなら「老後の思い出」になると、主君平宗盛に懇願したという物語である。

では、まるで漢の朱買臣が、故郷の会稽山に錦の袂を翻したように、錦の直垂を着て、みごと北国のこの地で討ち死にしたのにもかかわらず、なぜ実盛の霊はこの地に留まらねばならなかったのだろうか。（クセ）の最後に、「名を北国の巷に揚げ、隠れなかりし弓取りの名は末代にありあけの」と語り終えようとする実盛の言葉は、この地に残った我が名譽への自負にあふれ、執心など残ろうはずがないほど、晴れやかで堂々としている。実盛にとっては、このまま、みごと故郷

に錦を飾って討死した名誉の武将として、この地の人に記憶されたかったのではないか。

しかし、これまでの物語が表向きの取りつくろった懺悔であることを、ワキの他阿上人はするどく見抜いていたらしい。「心の水の底清く濁りを残し給ふなよ」と、さらに懺悔の話を続けるよう実盛に諭し、本当の執心のありどころを告白させようとする（ロンギ）。

序破急の理論でいえば、急の部分に該当するだろう。能のクライマックスで急激に執心の在り処、物語の核心を吐露し始めるのである。それは、手塚の太郎の郎党の、首を掻き切る奮闘をみせつつも、最終的には多勢に組み伏せられた場面にあったが、その力尽きた老体への悲しさや、手塚の太郎ごときに討たれた無念の根底にあるのは、実盛の秘かな願望「巡り巡りて」この地で「木曾と組まん」と企みしことが叶わなかったことへの心残りに集約されるように思われる。

木曾義伸と実盛の因縁は深い。『源平盛衰記』によれば、源氏の遺児義伸を木曾でかくまうよう勧めたのは、実盛だった。まだ源平の二項対立が明確でなかった時代に生きた実盛は、保元平治の乱では源義朝につき、その後は平家に仕えた。義伸討伐の一軍となった実盛が、二年前の石橋山の合戦で、義伸軍に寝返ることを進言したのは、本当に仲間の意思を試すためだったのか。ともあれ、今日の味方が明日の敵となる激流の時代を、剛と知恵で賢く生き抜いてきた実盛らしいアイディアにも思われるが、すでに時代は変わり平氏の家臣は平氏に一生忠誠を誓って戦うことが大義となっていた。生まれ故郷に錦を飾り、義伸に討たれたいという願望は、平氏を今脅かしている義伸を救ったのは自分であるということ、かつては源氏の家臣であったが今は平氏に強い忠誠を誓って戦っていることへの自己確認にも似て、実盛の人生の総決算としてふさわしい。しかし老体は力尽き、成就できなかったのである。

ところで、こうした武将の人生の走馬灯のような能《実盛》は、時を経て、戦国武将にも人気の曲だったと言ってよいようである。たとえば、『実盛』の上演記録のうち際立ってシテの実盛を勤めているのは本願寺坊官の下間少進だが、石田三成、毛利輝元、前田玄以、豊臣秀次など武将の前での演能が多い。

しかし、能《実盛》にもっとも自己を投影して愛好した戦国武将は、伊達政宗かもしれない。年不詳ながら、諸侯とともに御能見物をしていた政宗は、『実盛』のシテ語り、「実盛常に申せしは、六十に余り軍せば、若殿ばらに争ひて」と、大夫が勇しく謡った時、声をあげてひたすら落涙したという。まわりの人々はその様子を見て、ほんとうに、実盛と同じようなお年の方々は、我が身を重ね合わせられるのだなあと、感動し落涙した（『命期集』）。

その政宗の死の前年、寛永十二年（一六三五）正月、徳川三代将軍家光の御前で響応能で、能《実盛》の太鼓を、政宗（満六十七歳）が勤めた。『玉露叢』によれば、先ず玄人の太鼓役者である観世左吉を先に舞台に出し、その後で政宗が登場総役者と一緒には礼をしたので、家光はじめ諸侯はどっと褒めたという。最初は左吉が太鼓を勤めると思わせておいて、催主政宗の登場という、なかなか派手な演出である。

この時の政宗の装束も、伊達男の面目躍如の派手さであった。下着は、浅葱地に金紋の緞子で裏は紅梅。その上は、びは鹿子の小袖に金紗の五色の糸で縫った七寸四方程（直径約20cm）の雪に薄の五ツ紋、裏は浅葱。それに、前に唐團扇と蔦唐草を金で摺箔にした綬綾の肩衣。袴はひはだ地（赤茶色）に織で金紋の菱という若やいだ装束だったが、実は、前年から、すでに癌と推定されている病を発症し、歩行も困難な状態だったという。政宗の激動の人生と家光への強い主従意識に鑑みると、能《実盛》には単なる遊興以上の意味をみだしていただろう。体力が許すなら、シテを勤めたかったにちがいない。